

中国「80後」の「青春文学」に対する 日本流行文化の影響

盧 薇 薇

1 はじめに

「中国現代文学の中での青春文学は新中国の成立に伴って誕生した」¹と言われる。50年代に、楊沫が『青春之歌』²を、王蒙が『组织部新来的年轻人』³を、宗璞が『紅豆』⁴等の作品を著し、はつらつとした青春期の鮮明な痕跡を残した。しかしながら、新中国においては時代の精神と時代の要求が厳しく、「青春文学」にとっては個性と自由が絶えず規制を受け続けた。

「青春文学」は外延と内包が絶え間なく変化して流動するが、本稿で分析しようとする「青春文学」とは、作者がおもに中国が改革開放後の80年代以降に生まれた若者であり、読者層がおもに青少年であって、作品の内容がおもに青春について、例えば、アニメ・漫画、成長、幻想、武俠などを題材とする、中国で圧倒的な人気がある文学のことである。

社会の大きな変化、市場経済の浸透、中国と西洋の新旧の文化衝突などが原因で、「80後」の「青春文学」は独特な文学創作観念を形成し、伝統文学に従属した五四運動以来の旧式な「青春文学」から離脱して、現在の文学作品の中で独立した分野を成立させたことは注目に値する。

中国現代文学の後継者である「80後」の「青春文学」の創作は伝統文学者によって誤読を受けて評価されないことが多いが、伝統文学とは異なる特性を持っていることは評価すべきであり、中でも日本流行文化の影響は考察に値するものだと考え、本稿において考察することにした。

2 「80後」の「青春文学」の特徴

(1) 「青春文学」の三つのテーマ

「青春文学」の萌芽をもたらしたのは2000年に出現した韓寒の小説『三重門』⁵である。韓寒は主人公の林雨翔の不如意な生活を描写することを通じて現代のモデル教育を非難し、叛逆的な青春という主題を打ち立てて、同世代の読者の共鳴を得た。『三重門』に続く作品としては、春樹『北京娃娃』⁶、郭敬明『夢里花落知多少』⁷、張悦然『葵花走失在1890』⁸などがあり、青少年時代にこれらの作品を創作した「80後」は、作品の中で本心を打ち明け、自分の体験、個性の奔放、成長の苦悩を訴え、大人の世界に対する不満を吐露した。かくて「80後」の作者の一群は、青少

年の生活と思想にセンセーションを巻き起こし、「青春文学」の繁栄を宣言したのである。

自我、理想と愛情は「青春文学」の大きな主題である。内容と題材を表現する「80後」の作品は、学校・時代・社会に対して若々しい視線を注ぎ、「80後」の生活体験を反映させて写實的、客觀的に描写する。

1. **自我**—青春期における心理は叛逆的で、自意識に目覚めており、「青春文学」の中では自我が最も重要なテーマとなる。若い「80後」の作者は、身の回りの人々を素材にして描き、登場人物に強い個性を持たせる。例えば、郭敬明は『愛と痛的辺縁』⁹の中で、出生以来の過去を振り返って、自分の性格と目的が成長するにつれて変化する動因の分析を試みている。彼の散文集『左手倒影、右手年華』¹⁰では、心の奥底でマグマのように沸き返る感情を持つ、敏感で内気な少年を描写している。また張悦然も取材を受けた時に、『『葵花走失在1890』は自分の体験を多く描いている』と述べている。「80後」は自我の存在に対して大きな注目を払っていると言えよう。

2. **理想**—理想も青春時期に欠かないテーマである。青少年は将来への憧れであふれている。夢を追う「80後」の作者は文字で自分の青春の理想を表現して、不如意な現実と晴らせない鬱憤を述べる。彼らは作品の登場人物のように、自由平等を切望しており、人と自然の調和がとれた社会で自由に実力を発揮したいと願っている。例えば、韓寒『三重門』の主人公の林雨翔は学習の抑圧から逃れて蘇珊と恋愛したいという理想を持っている。高い理想をもつ若い「80後」は彼らの作品を通じて、理想と自由の生活を心から望んでいるのである。

3. **愛情**—愛情とは青年が青春期に存分に発揮する感情である。「新概念作文大賽」というコンクールは「青春文学」の起点として、作者に文字で本音を吐露させた。「新概念作文大賽」の作品選集では愛情をテーマとする作品が70パーセントを占めている。「80後」の「青春文学」の文章には様々な愛情をテーマとした作品が見られる。例えば韓寒の『三重門』の中には曖昧な愛情、郭敬明の『小時代』¹¹には物欲の愛情、張悦然の『桜桃之遠』¹²には新たな生命を得させる愛情、春樹の『北京娃娃』には性的男女交際の愛情を表現している。まさに作家の莫言が「80後」の創作者を評論したように、「彼らは早く世俗に染まりたがらず、金銭と権勢を信じず、愛情しか信じなかった」¹³。「80後」の作者には愛情についての斬新で丁寧な創作スタイルがはっきりと現れている。

(2) 「青春文学」の産業化の趨勢

「現代の青春文学が全面的に発展することは、中国文学史の変遷だけではなく、現実の世の中を効果的に開拓した。理論的には青春文学は歴史と現実とに二重に存在した。」¹⁴「80後」の代表である韓寒『三重門』、郭敬明『幻城』¹⁵、張悦然『葵花走失在1890』は、五四運動以来の中国の新文学がテーマとした現実主義、ロマン主義、モダニズムを受け継いだ。つまり「青春文学」は伝統と現実とに二重に存在したことによって、人気の絶頂期に到達するとともに、青少年にふさわし

い新文学を打ち立てたのである。

文学産品は重要な文化産品として、出版界に限らず、マスコミの領域に関わる文化産業であり、文学産業と言うこともできる。文学の産業化は、「文学創作が強い個人の信念によって自分を救う個人行為でなく、消費者の需要を作り出して、消費者の求めに応じる消費行為」¹⁶を意味している。現代の文学の生産には産業化の趨勢があり、文学の出版は主に市場の出版社にコントロールされるが、「青春文学」の作者も市場に刺激されて、文学産業を創立している。

「80後」の「青春文学」を代表する郭敬明は、2006年に「上海柯艾文化伝播有限公司」を創立して、この会社の代表取締役となり、「80後」の作者たちの中で最初の社長となった。2008年、郭敬明は「青春文学」の雑誌である『最小説』の編集長として、第一期コンクール「The Next 全国文学新人選抜賽」を開催した。このコンクールで上位12名の新人は「柯艾文化」と契約を締結する。この「柯艾文化」は今では契約を締結した作者が100名以上を数え、強大な「青春文学」を創作する団体となっている。例えば笛安や落落や安東尼などは有名である。このほか、郭敬明は「青春文学」産業を流行音楽や漫画や映画などの産業へと展開させ、2005年、初めて音楽小説『迷蔵』を出版した。2010年、郭敬明が編集長として発行している漫画雑誌『最漫画』は、中国の漫画定期刊行物の販売部数の最多記録を塗り替えた。2013年、郭敬明が自作の小説『小時代』を脚本として監督した映画『小時代』が初上映された。

3 日本流行文化と「80後」の「青春文学」の関係

(1) 現代中国の消費文化の文脈

近年、アニメやコミック、ファッションやオンラインゲーム、そしてライトノベルや流行音楽などの日本流行文化が中国でも流行するようになり、文化の発展、消費の特徴が似通ったものとなり、「青春文学」との関係が密接になってきた。

八〇年代、村上春樹が創作した『ノルウェイの森』¹⁷は「青春文学」の萌芽を物語る作品であった。東京は当時3つの文化特徴があった。第一に、先進国の大都市として、情報が多く、都会生活の気楽さ、強い虚無感、流行文化の発達があった。第二に、市民社会として、精鋭な知識人文化の影響が弱く、イデオロギーの束縛から脱却し、資本主義の市民社会へと進化させた。第三に、日本はもともと唯美主義の「青春文学」の伝統があり、自由な恋愛を邪魔されて自殺する社会的な伝統などは、文学にインスピレーションを与えた。これらにより、「青春文学」は国際的な資本主義の都会を重要な背景としていることがわかる。

中国は改革開放後の二十年の発展を経て、経済は全面的に世界へ進出し、社会は消費の時期に入った。八〇年代から中国社会は次第に転換して、変化は各方面で一定のレベルに達している。市場経済の発展とともに、消費主義は大衆の観念に強い影響を与えている。「80後」は中国の改

革開放後の80年代以後に生まれた若者である。80年代から今まで、メディアの急速な発展は新興市場の繁栄を促し、文学も消費対象となった。「80後」は社会の変革の産物だと言えよう。この時代を見ると、「80後」が「青春文学」を体現した原因を解明することができる。

八〇年代中期以後、日本の都会の青年の感情と日常生活を描写した『東京ラブストーリー』や『あすなろ白書』などのトレンドドラマは、中国やシンガポールなどのアジア国家に人気を博し、日本の『ドラゴンボール』や『セーラームーン』『ポケットモンスター』などのアニメは全世界で流行して、日本のアニメを底本とした『The Matrix』や『Kill Bill』などのハリウッド大作映画は全世界で公開上映され、日本の宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』はベルリン国際映画祭の金熊賞（2002年）とオスカー賞の最優秀長編アニメ賞（2003年）を受賞した。こうした日本のアニメやコミック、オンラインゲーム、映画などの流行文化は各国の人々に注目されている。

八〇年代中期以後、中国の社会生活にも大きな変化が生じ、特にコンピュータやネットワーク、携帯電話などの通信機器、アニメやコミックやゲームなどの商業文化は学生たちにとってとても重要な存在になり、学生たちの生活環境を変え、文学の形式と精神にも変化を与えた。

（2）日本流行文化と「80後」の「青春文学」の受け手の分析

中国の消費者が中国の「80後」の「青春文学」を受容状況は、日本における流行文化の受容状況に似ていた。享楽を目的とする日本流行文化のファンに似た「80後」の「青春文学」の読者は、読書をレクリエーションと見なしていた。彼らが古典文学に興味を持つのは流行の文化消費でしかなく、「青春文学」の主因子はアニメ、コミック、成長、感情、幻想、ネットワークなどであったから、思想や感情や言葉が若い読者と興味が一致していた。こうした読書は強制されることがなかったため、「青春文学」が学生たちの流行の読み物になったのは自然の流れであった。

日本貿易振興機構の調査報告¹⁸（2007年）によると、10万5千億円の市場規模となった日本文化産業が世界第二位になり、特にその中のアニメやコミックなどの流行文化は海外でも好評を得た。同様に、中国での「青春文学」の販売量は図書市場の半数を占めた。長江新世紀文化伝播有限公司は販売金額が1億3千8百萬元（2007年）であり、郭敬明グループはその中の60パーセントの金額を占め、「青春文学」の雑誌の『最小説』は毎期40万余部を販売した。

郭敬明は取材を受けた時に、流行文化に関する作品を多数読んだと回答した。彼は新時代の読書方法を明示している。ある調査報告によると、郭敬明の小説ファンのほとんどが、日本のアニメ・コミックとオンラインゲームに興味を持っていた。郭敬明の小説ファンは日本のアニメ・コミックとオンライン流行文化の世界の中で成長したのである。日本のアニメ・漫画の文化は、知らず知らずのうちに人を感化する浸透力を持っていたので、郭敬明の「青春文学」は青少年の好みにぴったりであり、一挙に図書の人気大爆発の神話を起こして、伝統の図書メディアに新しい

読書スタイルと思惟を提供した。

(3) 「80後」の「青春文学」の現代資源

莫言は「80後」作家の代表である張悦然を評して、「彼の文章は構造上、ホンコンと台湾の恋愛小説や西洋の芸術的な映画や世界の童話、経典などの影響がみられる。小説のイメージとシーンにおいては、日本のアニメ・コミックの清新で垢抜けたシンプルさ、純粹さや、西洋の油絵の鮮明な色彩と閑静な雰囲気や、ファッションの流行と自由なグレードや、バレエの上品な踊る姿やゴシック様式建築の強い上昇効果が見られる。小説の言葉の上では、流行歌の親しさと煽情や、詩の境地の簡潔さや、映画のせりふの含蓄が見られる」¹⁹と指摘した。

非常に優れた鋭い洞察力を持つ莫言が、「80後」が恋愛小説、芸術的な映画、童話経典、アニメ・コミック、西洋油絵、ファッションなどの流行エレメントを独特な創作資源として吸収したことをこのように詳述したのである。「80後」の「青春文学」は「伝統文学の保守的現状を打ち破って、現代文学に対する観念と創作の方法を豊かにし、文学の審美の視野を拡大した」²⁰。そこには日本のアニメ・コミックの文化の影響が非常に大きい。日本のアニメ・コミックは青少年の観念と思考方法に知らず知らずのうちに感化した。深遠さの瓦解、伝統の転覆、言語の変化と流行語の使用は、新時期の成長し始める「80後」の若者を取り巻き、彼らの作品に徹底的に出現して、文学作品を創作する新しい気運をもたらした。

彼らの創作資源は主として純粹な現実と読書の経験だけである。「彼らは文化の蓄積と芸術の伝承の上で、横の参考を重視し、縦の相続を軽んじる。」²¹ しかしながら、彼らは市場経済と流行文化をよく知っているので、あらゆる手をつくして読者の好みに迎合し、大衆文化の有利な条件に頼って、迅速に奮起する機会と豊かな市場収益を簡単に手に入れたのであった。

4 「80後」の「青春文学」における日本流行文化の体現

(1) 村上春樹の困惑についての文化と中国「80後」の青春についての創作

「80後」の作者は村上春樹の影響も受けたと考えられる。村上春樹が1979年から創作した十部余りの小説は発達した資本主義社会を背景としている。彼は読者に、発達した資本主義社会に暮らしてバランスを失った青少年の精神世界、その特定の時代と社会の環境に青年の生活状態を示してみる。村上春樹の小説には、どこもかしこも退屈と孤独と困惑の雰囲気が溢れている。『ノルウェイの森』に登場する盲目的で困惑した人物は、無意識の内に戦後の日本青年の精神上の流離感を表現している。

「80後」は中国の経済封鎖の時期から改革開放の時期へ進展した80年代に生まれ、中国社会が全面的に市場経済システムを構築した90年代に成長して、中国が世界経済貿易組織に加入した21

世紀に成人した青年たちである。思想観念が最も自由で、価値観が急激に変化した21世紀には、物質生活が少しずつ豊かになり、精神生活は次第に伝統から脱却していった。そうした抵抗する術がない時代の変遷に、個人の精神状態は混乱したのであった。彼らの叛逆と孤独には、価値観の弱さと消沈の傾向を示している。郭敬明を代表とする憂鬱を帯びた「青春文学」は青春期の憂鬱や感傷や困惑などを力強く描いている。現実と夢を結び合わせて、半分朗らかで半分憂鬱な青春を描くのである。郭敬明の『悲しみは逆流して河になる』22の中で、成績がよくて楽観的な少年齊銘が墮落した少女易遥を気にかけて深い困惑に耽るという具合である。

(2) 日本伝統の物哀れの美しさと「80後」が創作する「青春」

紫式部は『源氏物語』の中で、「哀れ」の前に「物」を加えた。哀れな感情を持つ美感はものごとの物哀れの美しさだ。川端康成は悲しさと美しさは通じ合っていると述べた。日本文化の中で伝統の審美意識である物哀れは、日本人の精神世界と生活のしかたに浸透した。確かに日本文学には、特有の曖昧な美感や、感情的な雰囲気や、情趣つきない思いがある。物哀れも自然に日本のアニメに浸透している。例えば『るろうに剣心』の主人公の緋村剣心は、春の夜桜と夏の満天の星と秋の満月と冬の初雪を見てから、心の中で寂しさを味わってばかりいる。

曹文軒は「物哀れは日本人の桜のコンプレックスに関係する」と言った。花見の時、桜の美しさを知る。だがなんと、美しい桜はあっという間に散って見えなくなる。それを人々は、すべてが幻のように消えたと感じるのである。青春期の「80後」は愛情を主題としたが、彼らが追求める愛情は熱烈でロマンチックで純粹であったが、最後には決裂して消え失せた。まさに莫言が論評したように、「80後」の青春についての作品は、「始まりは美しく、途中は困難で、結末は悲惨であった」²³。張悦然の『葵花走失在1890』の中でのヒマワリは、終始人間としては梵高の世界に入ることができないが、死んではじめて愛情を永遠のものにできたのである。郭敬明は『幻城』の中で、自由と孤独と憂鬱についての夢の世界を描いた。これらの美しさと残酷さと温かさを並立させた作品の中で、青春期に充満した遺憾、人知れぬ悩み、後戻りできない宿命は、日本文化が暗に含む矛盾と物哀れの美しさに非常に類似している。

(3) 「80後」の「青春文学」におけるファッション現象

「80後」の作品の中でのファッション現象は、既に世界的な文化現象になっている。「80後」の作者は、多くの文化現象や時代思潮や文学伝統から、いい資源を選んで吸収し、手本にできる資源を改造して発展させ、自分の形象と発展に影響する資源を遮断する。「青春文学」は現代中国社会、市場経済と日本流行文化、メディアの影響を深く受けており、日本流行文化からヒントを得た「80後」の作品には、いずれも消費と娯楽とファッションの社会生活、文化現象、人物イメージ、そして活動場面を重んじないものはない。「青春文学」は、おもに北京や上海などの大

都市に展開し、鮮明な都会的特徴を持つ場面を展開する物語であり、大量の流行因子と物質因子をもって、キャンパスや駅、歩行者天国やバーなどで発生し、登場人物の嗜好品は、ブランド品や高級車や豪邸である。例えば、春樹の作品では、様々なバーやディスコやロックンロールやパンク精神などであり、郭敬明の作品では、様々なレコードやプチ・ブルジョアの生活などであり、張悦然の作品では、哀愁や装いや食物を描くことである。

(4) 「80後」の「青春文学」の作品における日本のアニメ・コミックの文化因子

「80後」はまた、日本のアニメ・コミックとともに成長してきた。日本のアニメ・コミック文化は目に見えない感化作用と耳に聞こえない浸透作用を持っており、「80後」の作者に多大な影響を与え、彼らの創作した作品の中には、日本アニメ・コミック文化の因子がよく見られ、「80後」の「青春文学」は日本のライトノベルであるとも言える。考え方と文章の構造と創作観念から、これらの若い作者が日本文化の影響を受けていることが見てとれる。

日本アニメ・コミックは主に、極限を超えて崇高な精神を発揮する少年漫画と、愛情をテーマとする少女漫画から成っている。中国「80後」の青春文学の永遠のテーマは愛と死である。その中で、多くの作品は日本アニメ・コミックを模倣している。売れゆきがよく純粋な恋愛を描く小説は多く、それらは日本少女漫画の痕跡をとどめている。例えば、小妮子の『悪魔之吻』²⁴と郭妮の『麻雀要革命』²⁵は、人物の設定やプロットの発展などから、日本漫画『イタズラな KISS』と『花より男子』を模倣していることがわかる。一部の作品は、青年の精神世界と人生観を反映して、その中に死や困惑や愛の素晴らしさと残酷さを描いている。例えば、郭敬明の『幻城』と日本漫画『聖伝』、郭敬明の『爵跡』²⁶と日本アニメ『フェイト/ステイナイト』は主旨がよく似ている。

また「80後」の作品の陳述には、アニメ・コミックの脚本の構成が反映している。例えば、ユニットドラマに似た連鎖構造や網状構造、重複技巧がある。重複技巧は陳述の構造、陳述の意義において用いられる。重複技巧は異なる立場から同様の事件に対して行う陳述である。例えば、日本アニメ映画『耳をすませば』では、貸出カードを紐帯として、少女または少年の立場から、異なる貸出カードに同じ名前が出現する場面を繰り返す。このため感情が深化して、ストーリーの主旨が強調して表現される。中国の伝統作品にはこうした表現技巧は少なかったが、「80後」の「青春文学」には普遍的な陳述スタイルとなった。例えば、張悦然の『葵花走失在1890』には、ヒマワリのイメージが繰り返し出現するので、作品の境地が強調されている。

日本アニメはたびたび光と影で人物の感情とストーリーの雰囲気であらわす。映画のクローズアップシーンのような表現技巧もあふれている。それは「80後」の創作に影響して、場面と感情の上で映像化の言葉で表現する習慣を成立させ、映像化の創作の方式を通じて読者に視覚化の文脈を理解させる。まず、人物と物事の描写は、視覚化と映像化を行う。「80後」の作者は登場人

物について詳しく描く。それは、服装のブランド、品質と人物の独特な気質を含む。例えば、郭敬明の『小時代』では、主人公のカップルの恋人はLVやHERMESなどのぜいたくなブランド品が好きである。次に、境地を表現する色は、文字に特殊な映像感を与える。例えば、郭敬明の『幻城』には「一把紅色的三戟劍貫穿她的胸膛，將她釘在了黑色的山崖上，風吹動着她銀白色的長髮和白色魔法袍，翩躚如同絕美的舞步」²⁷というセンテンスがあるが、「紅色」「黒色」「白色」はそれぞれ憂鬱・恐怖の感情や死の悲劇感を代表している。最後に、生活のシルエット化は、「80後」の「青春文学」が日本アニメ・コミックから受けた影響の中でも特出したものである。「80後」の作品には、たびたび陽光と落葉を描き、読者にアニメ・マンガの静態の画面に似た、明るくてすがすがしい光景を伝える。例えば、落落の『年華是無効信』の「从兩樓，能看見剛進入秋天的銀杏樹還不怎么茂盛的樹冠，大半還綠着，只有零星的黃，在几个角上耀眼。而停在樹下推着自行車的男生，抬起頭，臉上就落下一層溫和而隱約的暮色，如同哪個電影中，無限美好的特寫。緩慢的鏡頭，从他身上，一直搖過來」²⁸というセンテンスは、日本アニメのように、文字で生活情景や主人公の心境を表現している。

5 日本流行文化における「80後」の「青春文学」に影響した因子

(1) 「80後」の「青春文学」は日本流行文化を生活の手本とする

九〇年代中期以後、日本流行文化は様々な形で中国の文化市場に流通し始めた。それらは市場細分化の原則に従い、青少年の需要によって生産された。日本のドラマとアニメにおける都会青年の日常生活と感情世界は、同年齢の視聴者に強い共鳴を喚起した。「受け手は自分の行為を表現するいとぐちを発見したいため、新しい陳述構造を追及し始めた。」²⁹そして、自分の文化趣味と生活様式のモデルとなる作品が探し出せなかった「80後」に対して、日本流行文化は新鮮で豊かな心の糧を供給した。日本流行文化は上品で、今風の生活と新式恋愛の手本となった。日本の青年の愛情には西洋の自由の価値観に導かれた不倫の恋や同性愛なども含んでいたが、こうした唯美主義で強制を行わない文化は、多元的な価値観を持つ中国の都会の青年に歓迎され、独特な魅力をもって、中国の都会の青年を惹きつけて、彼らの成長過程と亜文化の形成過程に深い痕跡を留めたのである。

観察の視点と陳述の重点から見ると、「80後」の作者は現実の平凡な日常生活に興味を持ち、重大な主題と叙事との間に一定の距離を置いて、無名の人物、小状態、小風情などの因子を用いて創作した。郭敬明の『小時代』の「秒針、分針、時針，拖着虚影转动成无数密密麻麻的日子，最終匯聚成時間的長河，變成我們所生活的龐大的時代。而我，和我們，都是其中，最最渺小微茫的一个部分」³⁰というセンテンスには、描写対象の平民化と表現技巧の煩瑣化が進み、文学創作と日常生活の関係が強くなっている。「80後」の作者は、表現技巧の上で、物事の一部から物事全

体を見通すことを重視して、個人の生活と感情を詳しく描き、伝統的な小説芸術を用いて現在の青年文化との繋がりを築いた。市場経済と流行文化を熟知して、文学追求と表現技巧に専念した「80後」の作者は、まさしく大衆文学に適応したのである。

(2) 「80後」の「青春文学」による日本流行文化の市場メカニズムの導入

日本経済産業省の調査報告によると、全世界で上映するアニメの中で日本アニメが6割を占めるといふ。2003年、日本がアメリカに輸出したアニメ関連の文化製品の収益は43.59億ドルで、鋼鉄の収益の4倍である。現在、広義のアニメ・コミック産業は日本国内総生産額の10パーセント余りを占めており、日本で三番目の収益を誇る産業になった。

日本アニメ産業の発展に伴って、アニメ関連のマーケットも重要になった。関連マーケットとは、アニメやゲームをテーマとした食品、おもちゃ、アクセサリなどの実物、音楽、画像、図書などの文化製品である。これらの製品は様々なパターンがあり、アニメとゲーム関係の大きな産業チェーンを形成している。八〇年代、日本東映アニメーション株式会社のプロデューサーは、テレビ放送によって『鉄腕アトム』のコストを回収し、アトム関連のマーケットで収益を得ることに努めた。例えば、人形やカレンダー、タオル、シャツ、かばん、バッジ、ライター、便箋などである。アニメ関連のマーケットは、アニメーション会社に多くの利潤をもたらすと同時に、アニメを伝統とする製造業との深い繋がりを築いている。日本で40パーセントを占めるアニメ・コミック生産額は関連マーケットが製造している。日本アニメはそのほとんどが人気のマンガを脚色したものであり、アニメ関連の製品を売ることによって、産業全体の発展を促進しているのである。

「現代商業の発展と社会に浸透した思想は、商業を流行文化の主導力と表現ルートにする」³¹と言われる。郭敬明（2003年）が中国図書の人気を大爆発させた神話に象徴されるように、現代の「青春文学」は市場競争の時期へ進んでいる。実力と見識がある出版機構は市場拡張を期して日本の現代商業規則を研究し、出版界、広告界、ネットワーク、新聞社、教育機構などから資金を集めて「80後」の「青春文学」の作者と文学作品を周知させ、映画やアニメやゲームなど「青春文学」関連の製品を開発して、図書市場を刺激しようとしている。出版機構はアイドル作者を育成すると同時に、きれいなパッケージ、贈り物、アイドルの写真を作製している。こうしたセールスポイントが文化消費の流行因子となり、青少年のニーズに応じている。例えば、「青春映像小説」を創作する饒雪漫は、文学出版、映像、レコード製造の結合を試み、さらに文字の映像化、歌詞化を行って、斬新で時流に乗る陳述を創造し、読者の要望に応じている。

6 結び

中国「80後」の「青春文学」は「80後」の作者が青春期の学生時代の生活を重要な内容として描写した文学作品の類型である。こうした青春を描く作品は、市場に長期間不足していたが、機運に乗じて生まれ、青少年の期待に応えた。現在の「80後」の「青春文学」は、市場の領域から文壇の領域へと進化し、中国現代文学となり、商業時代の文学構造を刷新した。「80後」の作者は市場経済と流行文学を熟知し、読者の反応と市場の需要を重視し、日本流行文化にヒントを得、それらを取り入れて、文壇に新しい様相をもたらした。彼らは現実の平凡な日常生活を描いて、大衆文学として適応した。郭敬明を代表とする「80後」の作者は出版機構と協力し、市場を拡大するため日本現代商業規則を研究して、競争が激しい文化産業市場と、多様化する需要がある読書群に適応し、「80後」の「青春文学」の商業化の発展を極点に到達させるよう努力している。

注

- ¹ 賀紹俊「以青春文学為常項——描述中国当代文学的一種視角」(『文学評論』2011)に指摘する。
- ² 『青春之歌』(1958、作家出版社)。
- ³ 「組織部新来的年輕人」(『人民文学』1956年9期所収)。
- ⁴ 「紅豆」(『人民文学』1957年「革新特大号」所収)。
- ⁵ 『三重門』(2000、作家出版社)。
- ⁶ 『北京娃娃』(2002、遠方出版社)。
- ⁷ 『夢里花落知多少』(2003、春風文芸出版社)。
- ⁸ 『葵花走失在1890』(2003、作家出版社)。
- ⁹ 『愛与痛的辺縁』(2003、東方出版中心)。
- ¹⁰ 『左手倒影、右手年華』(2003、上海訳文出版社)。
- ¹¹ 『小時代』(2008、長江文芸出版社)。
- ¹² 『桜桃之遠』(2004、春風文芸出版社)。
- ¹³ 『葵花走失在1890』(2003、作家出版社)、莫言「前言」より。
- ¹⁴ 焦守紅「為一代文学存照：関于当代青春文学」(『中国青年研究』、2008)に指摘する。
- ¹⁵ 『幻城』(2003、春風文芸出版社)。
- ¹⁶ 楊玲「当代文学的産業化趨勢与文学研究的未来——以青春文学為例」(『文芸争鳴』、2010)に指摘する。
- ¹⁷ 『ノルウェイの森』(1987、講談社)

- ¹⁸ 『日本文化産業紹介報告』（2007年3月、日本貿易振興機構）
- ¹⁹ 『桜桃之遠』（2004、春風文芸出版社）、莫言「前言」より。
- ²⁰ 朱愛蓮「八〇後文学創作特色評析」（『当代作家評論』、2012）に指摘する。
- ²¹ 白燁「文学方陣里的青春風采」（『人民日報』、2012年4月19日）に指摘する。
- ²² 『悲しみは逆流して河になる』（2011、講談社）は、泉京鹿が翻訳したもの。
- ²³ 『葵花走失在1890』（2003、作家出版社）、莫言「前言」より。
- ²⁴ 『悪魔之吻』（2007、湖南少年兒童出版社）
- ²⁵ 『麻雀要革命』（2007、二十一世紀出版社）
- ²⁶ 『爵跡』（2010、長江文芸出版社）。
- ²⁷ 『幻城』（2008、長江文芸出版社、20頁）に原文を掲載する。
- ²⁸ 『年華は無効信』（2005、春風文芸出版社）に原文を掲載する。
- ²⁹ Diana Crane 『The production of culture : media and the urban arts 』（1992、SAGE Publications）に指摘する。
- ³⁰ 『小時代1.0折紙時代』（2008、長江文芸出版社、15頁）に原文を掲載する。
- ³¹ 高宣揚 『流行文化社会学』（2006、人民大学出版社）に指摘する。

（盧薇薇：山口大学人文学部研究生）